

魂にとって“知る”とは何か？

——哲学者・ソフィストの魅惑——

納富信留

一、“魂”を語ること ——「哲学」成立の可能性——

“魂”という言葉、どこまで語ることができるか？ここに「哲学」の成立が掛かっている、私はそう考える。古代ギリシア哲学における“魂”への思索、とりわけソクラテスとプラトンを導き手として、できる限り明瞭にそれを語っていききたい。

“魂”というと、「魂の不死、輪廻、浄化」といった古代特有の宗教観念、あるいは、近現代にはすでに乗り越えられてしまった古い哲学概念、と思われるかもしれない。実際、近代以降、哲学の焦点は「思惟(cogito)」や「主観」や「心」へと移っており、“魂”はこうした哲学概念の悪しき「実体化」であると批判されるかもしれない。

しかし、ここで二つの点を考慮すべきであろう。まず、“魂”とは、けっして純粋な思惟や統覚といった点的な主観ではなく、感情や欲求、生命の営み全体を包みこむ動的な実体を意味する。人間に生まれついた諸々の欲望——性欲、金銭欲、名誉欲、支配欲など——をどう扱うか、いわば「怪物」をどう飼いならすかという倫理が、古代哲学における重要課題であった。魂へのそのような悲観主義的で冷徹な眼差し、また、実践的な関わりは、近代の透明な理性主義からは程遠い。だが哲学は、私たち人間が生きるこの現実を見据えなければならない。

また、「魂が実体である」ことが批判される時、それはそもそも何を意味するのか？「実体(ousia)」とは、アリストテレスの論究によれば、真にあるもの、そして「ある」を「ある」たらしめている根拠である。魂こそが、本来の

意味において「ある」のであり、私自身が「ある」ことの根拠であるとしたら、それを「実体」と捉える古代の思索は無碍に退けられるべきではなかろう。私が「ある」とは、一個の人間として「生きる」ことであり、魂とは「生そのもの」という地平で、正に「生きる」という現実の把握、その根拠を成している（プラトン『パイドン』105C-D 参照）。そうだとすると、「魂」や「実体」という言葉を失ってしまった私たち現代人の生や哲学こそが貧困なのであって、「実体化」といった批判によって“魂”を安易に退ける前に、「実体」という概念の可能性において“魂”の語りを再生させることこそが、哲学者の仕事ではないか。

「魂とは何か」をできる限り明瞭に語ることに、これが哲学の可能性、責務であり、それによって私たちが哲学し生きることが可能となる。この語り自体が、ソクラテスが促す「魂を配慮する」という、「哲学」の遂行となるからである。

二、「教育」を語ることの危うさ

他方で、魂の善さについて「教える／教育」を語ることには、ある種のいかかわしさが感じられないか。教育は、言うまでもなく、人間社会の基本的な営みである。しかし、この理念に潜む危険は大きい。「教える」と言うと、通常そこには、教える者と教わる者との非対称の関係、知る者と知らない者との絶対的な相違、優越する者からの一方的な影響、支配や操作（マニピュレーション）が含意される。それに対して、「学ぶこと」、すなわち「知らない」から「知る」への移行が、「教える／教育」との単純な対ではなく語られる可能性、例えば、対話において共に探究し学んでいく可能性が、模索されるべきかもしれない。「教育」は、哲学において、一体どのような仕方でも語られ得るのか？

若者を墮落させた罪に問われ死刑に処されたソクラテス、その真実を示そうとしたプラトンは、「教える」という概念がもつこの問題性に敏感であった。何よりも、プラトン対話篇において、ソクラテスは自らが「教える者」であることを明確に否定している。この点でプラトンの描写は、他の弟子、例えばクセノポンの著述とは根本的に性格を異にする。

前五世紀後半における「教育」の問題の重要性、そして危険性は、さらに「ソフィスト」と名乗る職業知識人において顕在化した。ソフィストは、プロタゴラス以来「徳の教師」を標榜して若者を中心に人気を博し、民主政アテナイで大きな社会的影響力を揮った。プラトンは多くの対話篇において、ソクラテスをソフィストたちと厳しく対決させる。対決の焦点は「徳の教育の可能性」に当てられるが、議論はたいてい開かれたままに終わる。

「徳は教えられるか？」という、当時流行りの論題を開口一番に問いかける若者メノンに対して（『メノン』70A）、ソクラテスは肯定・否定の両面から吟味を加えながら、決定的な回答を保留する。「徳とは何か」を知らない限り、それが「教えられるか、否か」を知ることは出来ないからである。また、「徳を教える」と自認するプロタゴラスに挑むソクラテスの論争も、教育の可能性をめぐる反転する。教育可能性を唱えながら「徳」を「知」から切り離すソフィストは、問答の末に「徳は教えられない」との結論に追いやられ、ソクラテスは「徳と知の一致」を唱えることで、逆の立場に至る（『プロタゴラス』361A-C）。これらの錯綜するやりとりは、魂をめぐる「教える」ことが孕む根源的な困難を示すものであった。

他方で、「教育」を社会の根幹として重視しつつ、それがポリス共同体において健全に授けられている、と信じて疑わない常識人——例えば、ソクラテスを告発したアニュトス——に対しては、ソフィストとソクラテスは同じ基盤に立っている（『メノン』89E-95A）。ソクラテスもソフィストも、人々の生を挑発し、魂を目覚めへと魅惑する、きわめていかがわしい「教育者」であった。

ソクラテスはソフィストとして処刑された。では、両者はどう異なるのか？魂について「教育」を語るためには、哲学者とソフィスト、両者の間を行きつ戻りつ、私たち自身のあり方を反省する徹底した思索が要求される。

魂を「知」へと誘い導く営みが、ソフィストのいかがわしさと一線を画して、純正な知を愛する営みであり得るのか？ 両者を分別するためには、何よりも、「知る」と「魂」との関係逆転させなければならない。魂という容れ物を前提にして、そこに知識を効率よく蓄えることを目指す教育理念を断固退け、むしろ「知」において初めて「魂がある」ことを成立させる地点へと、思索を立ち返らせなければならない。

三、“魂”を語り出す場 ——「配慮」の二つの次元——

では、「魂」を、どこで語り出すか？（私はギリシア語の“psyche”を意識しているが、無論日本語で十全に思考されるべきである。）

哲学が誕生する場面で、ソクラテスは、「魂」を「肉体・身体(sōma)」との対で語り出す。「魂／肉体」は、人間を構成する二つの物などではない。これらは生のあり方を方向づける二つの根源として、切り出されている。ソクラテスは自らの使命として、人々をこう挑発し、哲学へと誘っていた。

「世にも優れた人よ。君はアテナイという、知恵においても力においても、もっとも偉大で評判のよいポリスの一員でありながら、ただ金銭をできるだけ多く自分のものにしたいと配慮していて、恥ずかしくはないのか。評判や名誉のことは気にしても、知と真実は気にもせず、魂をできるだけ善きものにするように、配慮することも思い巡らすこともないとは。」（『ソクラテスの弁明』29D-E）

ここでの明瞭な対比は、一方で、金銭や持ち物や外見など自分に属する事物に執着し、それらを「できるだけ多くしよう」と努める生き方と、他方で、知や真実に思いを致し、魂を「できるだけ善くしよう」とする生き方との間にある。前者はすぐに「肉体への配慮」と語り直される（『ソクラテスの弁明』30A-B）。ここに切り出されている配慮の二つの向きが、「肉体／魂」という、生を導く相反する次元なのである。

“魂”とは、生を形づくる配慮の向けられる先である。その配慮によって形づけられる魂の善さが「徳(aretē)」と呼ばれる。魂とは、正しさによって善くなるが、不正なあり方によって破滅してしまうような、何かなのである（『クリトン』47D）。

魂を配慮することは、私たちが何の疑いもなく送っている日常生活、つまり、肉体にとらわれつつ生きるあり方から、まったく別の次元へと自己の視線を向け変えることであった。それは、肉体から魂をできる限り切り離し、魂がそれ自身として「ある」こと、すなわち「死」において実現する。

「死とは他でもなく、魂の肉体からの分離ではないか。この死んでいるということは、一方で、魂から分離されて肉体がまさにそれ自体になっていることであり、他方で、魂が肉体から分離されて、まさにそれ自体であることではないか。」(『パイドン』64C)

魂の配慮としての哲学は、純正な意味において「魂の浄化」であり、それゆえに「死の訓練」と呼ばれる(『パイドン』67E、81A)。魂は、人間の死という極限において初めて真に生きる、という逆説にある。ソクラテスの死という前三九九年の出来事、そこで哲学が誕生する様を描き出す『パイドン——魂について——』は、こう「魂」を語り出している。

四、“魂”の「形」 ——「知る」ことへの関わり——

魂の善さは、配慮によって形づくられる。ここで、魂の「形」が問題となる。例えば、欲望を最大限に解放して快楽を追求する生き方は、「穴のあいた甕」に喩えられる(『ゴルギアス』493A-494B)。他方、「秩序(kosmos)」、つまり、調和と均整を保つものこそが善き魂であり(同 504B-D)、そのような魂は、美しい。

だが、「形」という言葉は“魂”の語りにおいて、どこまで有効か？ 「形づくる」という表現が、職人が素材に手を加えて意図された機能を実現させる「制作モデル」に限定されるとしたら、この語り方は適切ではない。私たちの「配慮」は、素材としての魂を自由に加工して、それに形を与えるのではない。このような教育のイメージは——現に広く流布しているものではあるが——、相手の魂を思い通りに導くというソフィスト流の教育観、他者を支配する力のイデオロギーと紙一重である。そこでの魂は、自立した「他者」ではなく、支配と操作の対象に過ぎない。このような見方を断固拒否して、哲学の配慮が、自らの、そして対話する相手の魂を形づくり実現していくことは、果たして可能か？

「形」とは——「形相(イデア)」という概念が顕著に示すように——、ものの「あり方」、その根拠である。ものは「限定」を得ることで「ある」ものと

なり、形はそのあり方を現わす。調和や均整は幾何学的、数学的に表現され、例えば、円が永遠を、平方数（正方形）が正義を——ピュタゴラス派の思想では——表すように、形は数学的対象として、もののあり方の本質を現出させる。自然的なものだけではなく、倫理的なあり方も「形」において成立している。魂は、そのような「形（イデア）」を観取することによって、そのあり方を自らにおいて実現しようと努める。この世界に生きる私たちの魂は、いまだ明瞭な形を欠いており、あるいは欲望によって歪み、あるいは悪によって破損し、あるいは不純な思惑がフジツボのごとく付着して肥大している。魂が本来のあり方、「形」を回復することは、あらゆる存在の根拠としての「形」——善さ、正しさ、美しさ——への関わり、すなわち「知(phronēsis)」の可能性に掛かっている。

「知る」とは、データや情報の蓄積でも、正当化された信念の体系でもない。「知」とは、知の対象である形への関わりにおいて、魂が自らを形として実現することに他ならない。それは、私自身が「ある」可能性の地平である。

しかし、私たち人間は知において欠けている、つまり「正しい、美しい、善い」といった大切な事柄が本当は「何であるか」を知らない。そうである以上、その不知を、徹底して自らに突きつけ続けることによってしか、形との関わりは実現しない。逆説的ではあるが、「知る者」として他者の魂を形づくろうとする一般の「教育」は、結局は「知らない者」としての自らを隠ぺいし、真理と知への関わりから最大限に遠ざけてしまう。

プラトンとその後継者たちは、哲学（知を愛し求めること）の目的(telos)を、「自身をできる限り神に似せること」と表明した（『テアイテトス』176A-B、『国家』613A-B、『ティマイオス』47A-E 参照）。不完全な人間が「神」という完全性を模倣することは、先行的に支える根拠との関わりにおいて、魂がそれ自身のあり方を形づくことに他ならない。「知る」とは、このような意味において、魂があることの実現である。

五、“魂”の出産 ——「生む」ことの両義性——

私たちの生は、知の欠如においてある。欠如が自覚される時、そこに完全性への強烈な憧れ、愛が生じる。「愛（エロース）」とは、自己に欠けているものを求める飽くなき動きであり、知を欠く魂が自己を実現させる営みが、知への愛（フィロソフィア）なのである。「愛」は、現在は「ない」あり方における、いまだ「ない」もの、未来に向けての希求である。こういった「時間」の制約において、私たちは「出産」を行なう。

『饗宴』でソクラテスは、ディオティマという巫女から受けた「愛（エロース）」の教えを語る（201D-212A）。彼女はソクラテスに対して、私たちは誰でも、肉体において、魂において、身ごもっており、生むことを熱望していると説く（206C）。魂は、妊娠すると適切な相手を捜し回り、「美しきもののなかで」出産することを求める（206B、E）。そうして「知と諸々の徳、とりわけ、節制と正義」という子供を出産する、と彼女は語る。

一見突飛とも思われるこの比喻は、私たちが行なう哲学の営みやその衝動を、的確に表現している。私たちはさまざまな哲学の問いに直面して行き詰まり、模索し、魂の内に何かを宿す。その何かを適切な「言論(logos)」にもたらし、「思考(dianoia)」を生み出そうと、もがき苦しむ。その際に、さまざまな考え——過去の哲学者の著作であったり、友人との会話であったり——を手掛かりにして、私たちはついに自らの考えに形を与え、世に問う。その思考は、順調に受け入れられて確固としたものに成長することもあれば、時に厳しく批判されたり、やむなく遺棄されることもある。考えを孕み、生み出していく営み、やまれぬ衝動、苦しみと喜びは、まさに「魂の出産」と語るに相応しい。言論を懐胎し分娩する哲学の営みにおいて、私たちは「知」という自らのあり方を形づくり、生み出しているのである。

死すべき人間にとって「出産」とは、時間の制約との戦いである。私たちが生きる「時間」は、「永遠」をモデルとし、その「像」として制作された（『テイマイオス』37C-38C）。時間においてあらゆるものは生成し、変化し、消滅していく。この私も、ほんの短い時の間に、生まれ、成長し、年老いて、死んで

いく。不完全で欠如する存在者が、この時間のうちにありながら「永遠」に与り、「不死」を可能なかぎり自らに実現する。それが、「生む」ことである。あらゆる生き物は、「古いものに代わって、新しいものをつねに残していく」生殖と出産において、永世不死のものとなる（『饗宴』207D）。「出産」は、中間者にとっての、永遠、完全性への与りである。

ここで「生む」とは、何かを「生じさせる」ことである。これは、二つの重要な含意をもつ。まず、生じさせること、すなわち「制作（ポイエーシス）」は、「以前にはなかったものを、あることへともたらすこと」と定義される（『饗宴』205B-C、『ソフィスト』219B、265B）。この何気ない定義に、古代ギリシアの人々は大きな危険と魅惑を感じたことであろう。パルメニデスの原理によれば、「ない」ものはけって「ある」とされてはならず、したがって「生成」はあり得ない。世界の生成変転とは、人間の思いこみ（ドクサ）による幻想である。「ない」ということは、それ自体としては言葉や思考で捉えることもできない。したがって、「ない」と語り、それを「ある」へともたらす「制作」とは、偽り、まやかし、幻想といったいかがわしさを免れない。ソフィストの術は『ソフィスト』において、この「制作」の中で、それも「本当はそうでないのに、そう見える像」を作り出す技術として定義される（264B-268D）。他方で、哲学も含めたあらゆる人間的な制作は、「生む」営みである以上、このような妖しさをともなって生成するのではないか？

また、生むことは、価値においてつねに両義的である。生み出されるものが新たな存在、予測を越えたものである以上、出産がもたらす結果は、善悪どちらでもあり得る。出産が美しく善き子供をもたらすこともあれば、醜く悪しき子供を世に送り出すこともまたあるのである。生れた子供もまた、立派に成長して繁栄することもあれば、途中で死んでしまうことも、あるいは、歪んだあり方へと墮落することもある。より大きな才能をもって生まれた者ほど、修養によってもっとも素晴らしい事績を成し遂げることもあれば、反対に、甘やかしによって途方もない悪事をなす誘惑にもさらされる。「出産」は、永遠に関わる可能性と、無や悪に傾く否定性という両義性の上に成り立っている。

ソクラテスに「愛」を教えるディオティマという女性も、そして彼女によって開示される「愛（エロース）」そのものが、そのような両義性を体現している。

ポロス（術策）とペニア（貧困）から生まれたエロースは、中間者として不死なる神と死すべき人間との間をとりもち、対話によって両者を結合させる。エロースは、善きもの美しきものの狩人であり、術策を紡ぎ出し知を愛し求める「哲学者」であると同時に、また、恐るべき魔術師、薬の調合者、「ソフィスト」なのである（『饗宴』203D）。この「愛」を教授するディオティマも、ソクラテスによれば、「秘義を極めたソフィスト」のようであった（208C）。「生む」という魅惑的で危険な営みにおいて、哲学者とソフィストは再び決定的に重なっていく。

六、“魂”の産婆術 ——子供の判別、出会いの仲立ち——

魂が思考を生み出す時、その出産の手助けに「産婆」が必要となる（『テアイテス』148E-151D）。産婆は、身ごもり陣痛に苦しむ若者に分娩を促し、苦痛を和らげたり、時には——胎児が未熟で不適切な場合——流産を起こさせることもある。産婆には、出産の経験をもちながら今ではもう自ら生むことはない者、年をとった女性が、出産を司る神アルテミスから任命される。ソクラテスは、若者テアイテスに対して、この産婆の役割を果たすことを宣言する。

魂の産婆は、出産の手伝いの他に、二つの大切な仕事を果たす。子供が生れた後に、出産の善し悪しを判断し、それに対処する——紛いものの子供は遺棄するという——仕事と、生れる前に、良き出産をお膳立てする仲人の役割である。

魂については、肉体の場合とは異なり、立派な子供が生まれたか否か、それが本物か偽者かを適切に見分ける技術が必要となる。つまり、苦勞の末に生み出した「思考」が、果たして真理を現わしているのか、それとも虚偽であり単に本物らしいものに過ぎないか、が問われる。しかし、自身の内に宿し腹を痛めた子供には、誰もが愛着をもち大切に養育しようと、必死で子育てにあたる。親にとって、生み出した子供の善し悪しを判定し、それに冷静な対応を施すことは難しい。出産した本人は、真偽を適正に裁断することが出来ないのである。そこで要請されるのが、第三の立場「産婆」であった。しかし、産婆が生まれ

出た子供を吟味にかけて、不適切であることを明らかにし遺棄した場合、多くの親、とりわけ初産の親は、立腹して産婆を逆恨みすることになる。これは、疑いなく、ソクラテスの吟味、論駁がしばしばもたらす結末を示唆していることは、疑いない。

両義性を宿命とする出産に対して、完全な予測や制御は不可能であろう。生み出されたものは本性において完全ではあり得ず、生み出すという反復において、かろうじて永遠という完全性に与るからである。しかし、その中で、生れたものの「真偽」を判別するという困難な営みこそが、魂の出産そのものを成功させる。

また産婆は、どの魂とどの魂との出会いが立派な出産を——真で美しい思考を——もたらすか、経験からもっともよく知る者である。ここで再び、「美しきものなかで生む」という語りに注目しよう。魂に何かを宿した者が、「美」に与る相手を見出しそのなかに生む時に、優れた子供が誕生する。愛する者同士は、子供を生み育むという、不死に与る共同の営みにおいて、強い絆で結ばれる（『饗宴』209C）。子供の真偽は、けっしてまったくの偶然ではない。愛し合い出産する二つの魂のあり方が、生れる者の善さ、真理の基盤となるからである。

他方で、「愛」や「美」もまた、両義的であった。美はさまざまに人を魅惑し、恋する者は情熱と欲望に動かされ、駆け引きによって相手を誘惑する。恋においては、言葉の美しさ、甘い口説きや説得などソフィストの術^{わざ}が駆使される。しかし、強烈な欲情や抑え難い衝動から「愛」が向かう先は、何であれ、ただ生み落とすことではなく、真なるもの、永遠のあり方を生み出すことではなかったか？

七、“魂”の想起 ——「対話」において共に生きること——

私たちは、「現在」の変転のなかで、「未来」へ差し向けられた存在である。それゆえ、私たちの魂は「時間」において、出産することで永遠を志向する。だが、いまだないものを、新しくあるものへともたらす「出産」という両義的

な営みは、かつてあった全体、つまり「過去」に支えられ、初めて成り立つのではないか？ 私たちの魂がつなぎ止められ、真に「ある」あり方を成立させる場を、最後に探りたい。

そのために再び、出産を促す「美」と「愛」の経験について、考えてみよう。恋する魂は、相手の姿形のなかに「美」を観て取る（『パイドロス』251A 以降）。美しき者は自身から発せられるものが何であるか、を自覚してはいない。しかし、その美に引き寄せられた者からの絶対的な献身によって、恋された者の魂は、できる限り善くなるようにと配慮される。その者が与っている美は、他者を永遠へと誘い、同時に、自己のあり方を完成へと導くのである。

「美しい」とは、何らか本来の姿が輝き出る瞬間である。それを目にした途端、何かに打たれたような戦慄が走り、今ここにある美こそ、かつて燦然と輝いていた「あの何かである」という強烈な感覚が、私たちを襲う。そしてあたかも、天上から墜落し怪我をおった私たちの魂が、美の流出によって癒され、再び翼を生やしていくように、強い「うずき」を感じる（250E-252B）。私たち魂はかつて、あれらすべてを見知っていたのである。そうして、絶対的なもの——私たちを超え、揺るぎなくある何か——を「想起」することで、魂は、本来のあり方を取り戻していく。それは、魂が現にあるあり方に先行し、それを成立させている根拠としての「過去」である。「形」の顕現である美から、過去がかすかに想起される時、魂は自身の故郷へと帰っていく。想起は、魂が真にあった、「知」という場において、再び魂を育む。

「知る」ということも、私たち生身の人間にあっては、けっして永続し安定したあり方ではあり得ない。「知識」は、絶えざる忘却のなかで、想起と訓練によってかろうじてそのあり方を保つ（『饗宴』207E-208B）。それが、時間の内で肉体と共にある私たち人間の宿命なのである。しかし、魂と魂とが出会い、真理に向けて出産を行なう時、その営みは永遠に与る。そこで出会いと出産を成立させるのが「言葉」であり、「対話」という、知を愛し求める共同の営みである。「知」に向けて共に探究すること、探究のうちに「共に生きる」こと。哲学者の生、すなわち、魂がそれ自身であることが、ここに成立する。

頭ごと全身の向きを変えるように、この世界から、かの絶対的な地平へと、魂自身が向け変わるとしたら、その「知」への転向こそが哲学に他ならない（『国

家』514A-521C、533A-E)。「教育」というものを“魂”について語る余地があるとしたら、それは、かろうじてこの地点においてではないか？ 「知」に関わる可能性は、愛し求める渴望、葛藤と煩悶、そして生みの悦びにおいて、探究を共に生きる者にのみ許されているものであろう。

「哲学は、けっして他の学識のように語り得るものではなく、長らく事柄そのものに関わるあり方を共にし、共に生きることで、そこから、突然、いわば火が飛び移って点ずる光のごとく、魂のうちに生じ、それが自らを育てていくものなのです。」

(プラトン『第七書簡』341C-D)

後記： 本稿は、2004年7月17日、哲学若手研究者フォーラムで行なった講演の原稿に若干の手直しを加えたもので、その語りかけの口調を残した。テーマレクチャーに熱心に取り組んで下さった中村麻里子さんと北野安寿子さん、そして、掲載にあたってお世話になった太田宏平君、三河隆之君に、お礼申し上げます。一緒に講演をされた田島正樹氏は、「プラトンへの違和感」を魅力的に論じ、「無限を一瞬に理解する、テロリスト的理解」と批判された(『第七書簡』の言葉は、さだめしその典型例となろう)。プラトンの魅力と危険は表裏一体のところがあり、その両面を明瞭に示していただいた。大いに刺激を受けたこと、感謝申し上げます。

本稿で論じた内容は、「プラトン」(『東洋大学哲学講座2 哲学を使いこなす』知泉書館、所収)、『プラトン——哲学者とは何か——』(NHK出版)と密接に関係する。ご参照いただければ、幸いです。

(のうとみ のぶる／慶応義塾大学)